

3月人権コラム

オンラインの人権教育

大阪教育大学 岡田耕治

小中高では通常の授業を行っているのに、大学はなぜ通常にならないのかという声がマスコミで取り上げられたり、ネット上にあがったりすることがある。本学では、前期（4月～8月）までは、ほとんどの授業がオンラインであったが、後期の現在は少人数や実習をともなうものは対面で、それ以外はオンラインと対面の両方を行うハイブリッド型を実施している。ただし、百人を超える大教室での授業は、基本的にオンラインの状態である。

私が担当する「学校の役割と経営」「人権教育論」の授業も受講者が多いので、十月には対面で実施したが、それ以降はオンラインの授業となっている。人権教育の最終ゴールは、自分のことを大切に、他者を大切にできる実践行動にあると考えているので、例えオンラインであっても、そのゴールの実現に近づくようにしたいという思いから、次のような工夫を行うことにした。

オンラインの教材は、それぞれの学生の置かれている状況が違うことから、いつでも視聴できるような形で動画講義をインターネット上に置いた。それを視聴したあと、二百字から三百字で課題ノートを提出するという組み合わせを基本とした。しかし、これだけでは、一方通行の授業になってしまうので、前回の課題ノートに番号を付け、それを今回の学習に活かすようにした。少ないときでも二〇名前後のノート、時には全員のノートを掲載して、テキストとしたのである。

オープンにしたくない部分には、「のせないで」という表記を入れる約束のもと、その表記のないものを無記名で共有していった。子どもの人権の学習では、自らのいじめを受けた体験を書いた学生もいた。虐待についても、自らの体験をふりかえって見つめるノートが出された。また、「自分は本当に教員になりたいのか」「教育大で学んでいるが、教員になる自信がまったくくない」など、対面授業でのディスカッションでは出て来ないようなつぶやきもあった。そんなノートを、学生たちは真正面から受け止め、自分の考えをその番号の人にメッセージとして返していったのである。

ある学生は、前期のオンラインのみの講義をふりかえって、こう書いている。

「受講して良かった」と思える授業でした。毎回提示される課題に対して自分の考えを表現すると、先生を含めた多くの人から様々な意見を貰えることができ、そのフィードバックを基に自分の

考えをアップデートすることができました。さらに、他者の考えに対して自分の意見を述べることができ、その意見を他者が取り入れて生かしてくれる様子を見ることができたのがとても嬉しかったです。オンライン授業だったため課題に取り組める時間が多く、毎回じっくり練り上げた意見を送ることができた点が一番良かったと思います。〉

直接生徒や学生の顔を見ることなく授業を行うという体験は、四〇年以上の教員生活の中で初めてだったが、私にとっては忘れられない学生たちとの出会となった。